

グラブル妄想小ネタ羅
列伝

Par

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主にグラブルのクロスオーバー系小ネタ集です

※諸注意

- ・キャラ崩壊
- ・ゲーム本編・キャラフェイトエピソードのネタバレ有。
- ・メインストーリーは、原作準拠でアニメも参考にしています。
- ・作者の別作品『俺は、スーパーザンクティンゼル人だぜ?』のネタを投稿する場合もありません。

・タグは作品投稿の度に追加及び消去する場合があります。
以上の項目が苦手な方は、ご注意ください。

目次

勇者ヨシヒコと蒼穹の島	1
キン肉マンVS星晶超人 空の世界で大	
決戦!! の巻	21
グランブルー〜ファンタジ〜によ!!	41
勇者王ガオガイガー 空の勇者たち	57
グランブルーファンタジー 蒼穹黄金鉄	
塊 I—II I	82

勇者ヨシヒコと蒼穹の島

■
年に結構な頻度で何かと色んな世界から色んな人やメカやらがやってくる空の世界。

今回もまた、愉快的な世界から愉快的な住人が現れたらしく……？

「……で、なに……？」

どこかの平原でポツンと立ち竦む男女四人。

肩に小鳥を乗せた女性。杖を持った男。剣を持った逞しい男。そして、紫のターバンを巻いた男。

「や、我々も急にここに連れて来られたからね。例によって仏に」

「確か、〃新たな魔王が現れた〃……だったか？」

「だからって突然なんでこんなところに連れて来られてんの？ カボイの村でもないし、マジどこよここ。あのクソ仏、まいど唐突過ぎんだろ説明も無しにい」

「いいえ、場所は関係ありません。これも仏の導き、ここに魔王が居ると言うのなら、それを倒すのが勇者の務め」

「真面目え、ヨシ君変わらないねえ」

「けどその魔王がどこいんのかわかんねーっての」

何やら奇妙な会話をする四人。その様子からこの場に突然連れて来られたのがよくわかる。そんな四人の傍に現れたのは……。

「あの、どうかされましたか？」

「あ、第一村人！」

「む、村人？」

蒼い髪の少女と小さな竜、そしてその二人を連れた若い少年。突然杖を持ったキノコヘヤーに村人と呼ばれた少女達は、不思議そうに首を傾げた。

「えっと……別に私は村人じゃないですけど」

「おめえらこんなどこでポーつとどうしたんだよ？」

「ああ、えっと……ごめん、こつちのホク口の馬鹿は気にしないで。あたし達、ちよつと訳あつて急に連れて来られてさ……丁度誰かに話聞きたかつたのよ」

「そうなんですか……」

「何か大変みたいだなあ……。まあこんなどこじゃ何だしよ、取り敢えずオイラ達の艇
こいこよ」

「艇？」

見知らぬ土地で出会った少女達。彼女達に連れられた四人。

ターバンの男がヨシヒコ。小鳥の女性はムラサキ。もみあげ逞しい剣を持つ男がダンジョー。ホクロのあるキノコヘヤーで杖の男がメレブ。四人はそう名乗った。

大して彼らと出会った少女ルリアと子供ドラゴンのビィ、そして彼らと共に騎空団を率いる団長。三人はグランサイファーと言う艇に四人を連れこの世界の事を話すと四人驚愕する。

「すっげえ……島が空浮いてるう」

「大地が空にあるのが当たり前の世界か……なんとも、足元が不安な世界だな」

空を飛ぶ艇に乗り見せられた空の世界、その様子を見て驚く一行であったが一人メレブだけが合点のいった様子だった。

「あ……ああ。俺これ、これわかった俺わかつちやつたよお」

「なんだよ、何がわかつたんだよ」

「コラボだ。これ、コラボだわ」

「コラボ？」

「おや知らんのかムラサキ？ ムラサキ、知らんのか？ コラボ、つまり……コラボレー

ション！ つまり、夢の競演！ ずばり……コラボレーション！」

「同じこと繰り返してんじゃねーぞホクロ」

「お黙りムラサキ、お黙りたいらムネ」

「てめえ、いい加減そのホクロ引きちぎってやろうか……」

何やら険悪な様子を見せたメレブとムラサキ。それに待ったをかけ、話を進めさせたのはダンジョーだった。

「まあ落着け。それで……コラボ、だったか？ それは良いがメレブよ、俺達は一体全体何とコラボしたと言うのだ？」

「それだダンジョー……。空に浮かぶ島、空の世界……。空に浮かぶ島を私は、ラピ〇タかワン〇ース空島編以外となると、後一っしか知らん」

「……ラピ〇タと空島編とは何ですかメレブさん」

「うん、すまんヨシヒコ。これは例えだ。今そこは、関係ない」

「ええい！ それで、つまりなんなんだ？」

「うむ……グラブルだ」

「グラブル……？」

「そう……君と紡ぐ、空の物語」だよ」

「決め顔で言うなよ鬱陶しい」

「やかましいムラサキ」

と、若干第四の壁を突破しそうな発言をかますメレブは、この世界が自分達の世界以

上の摩訶不思議ファンタジーであることを語り、この世界で倒すべき敵を倒せば元の世界に帰れるであろう事を語った。

その話を一緒に聞いていたルリア達は、あまりよくわかっていない様子であったが突如響く大声に驚く事になる。

「ヨシヒコオ——ッ!! ヨシヒコオ——ッ!!」

「うっわっ!? な、なんだあ!?!」

「あ、仏だ」

驚くビィ、だが冷静なヨシヒコ一行。メレブが顔を空に向けると大空に浮かぶ雲の上に巨大な人の姿が浮かび上がった。

「ど、どこですか仏?」

「おっとそうだヨシヒコ……えっと、なにか……なーにか……あ、あった。はいコレ懐かしの」

「どうも」

メレブから一つ3D眼鏡を受け取るとそれを装着した。

「おっと待って……おっとおっと、待て待て、え、待って? ヨシヒコ、ねえヨシヒコ、

ヨシ……ヨシ君? ここでも私見れない設定なのかいヨッシー?」

「はい、見えません」

「マジで、えっえっ？ マジ……え、マジでヨシヒコ？ 眼鏡の事描写しなきゃわからないの……。そこは見えてる風で行こうぜえ？」

「すみません……。しかし、まったく見えないもので」

「ハハハ、ハッキリッ！ ハッキリキツパリ言う！ ハッキリキツパリ言うっ！ うわ、ブツタまげっ！ 仏だけに、ね。仏、仏だけに……んはあくつはつは！」

「つまんないよっ！ おい、一人で喋って一人勝手にウケてんじやないよ仏え！」

「あの……あの方、お知り合いですか？」

「知り合いつつーか……諸悪の根源？」

空に現れた巨人のような男。ムラサキに諸悪の根源扱いされた男は、仏を名乗りその後「魔王」について語った。

「あのね、あのー……ん、うん、すっごいね、あのすっごいこの世界の人にごめんさないんだけどね。つまり……あのくつまりね？ 仏達の、つて言うかヨシヒコ達の世界のね、悪い奴がさ？ 悪いやつ、つまり魔王ね？ それがこの世界に逃げ込んだんじやつたみたいなのね。ね、ねね？ で、ほつとくとヤバい的な感じなの。ヤバヤバ、ヤバーい！ つて言う風だから、まず魔王を倒すためにあるアイテムを——（中略）——と言うわけで魔王を倒し世界に平和をもたらすのだ勇者ヨシヒコよっ！」

「おい、台詞無駄に長いせいで端折られたぞ仏え！ そこ重要な事だったんじやないの

かあ!？」

「んじや、ヨシヒコよろしこつ! バイバイブーツ!」

メレブの指摘も無視し、仏は手を振り何処かへと消えた。残された一行は、ポカンと口を開け空を見上げたままであつた。

「……結局仏の言う魔王を倒せと言う事か……」

「ま、そうであろう。相変わらずザックリした情報しかえれなかつたがな」

「要点まとめて話せてんだよなあのクソ仏。アイテムつてなんだよ……」

「だがあの仏の事だ。思い出したように現れて適当に教えるじゃないか?」

「うむダンジョーの言う通りだな。それにこんな時にルリア達に会えたのは、僥倖と言えよう。何しろ我々には、土地勘どころか島を渡る足がない」

「そうですね……ルリア、ビィ。すまないが頼みを聞いてくれないか。仏の話は聞いたろうが実は——」

と言つた具合にヨシヒコ一行は、ルリア達に「魔王」を倒すため協力を求め空の大冒険へと旅立つたのだ……。

■ その旅は過酷であり、驚きの連続……のようで、そうでないような日々——。

「おつと、ちよつと待つてもらおうかあつ! 命が惜しけりや、荷物と食い物置いてき

なあ！」

「またかよっ!？」

突如現れた盗賊を見て怯えではなく呆れの悲鳴を上げるビイ。

「これで何度目だよ!?! なんか最近多くないか!？」

「うん……うん、ごめんねビイ君。多分……と、言うかあ、かーくーじーつーに、我々の所為だと思っ」

ヨシヒコ一行を迎えて以来やたら盗賊や山賊に出会う事が多くなつたルリア達。しかも妙に個性的な者達ばかりで、大抵は迂闊な人間で自滅も多い。今回現れたドラフの盗賊も自身の角が立派である事を誇る盗賊であり、実力はあるのだろうがそれを長々自慢する間にヨシヒコによって倒された。

「これも我々の世界の魔王の影響と言う事ですか……」

「嫌な影響だな」

「ぐうの音も出ないとはこの事」

ヨシヒコの言う影響にげんなりした様子のビイ。まったくその通りのためメレブも疲れた様子で空を仰いだ。

「しかしこの世界の魔物は、なんだ……俺達の世界よりも何と言うのか、強さと言うか………迫力があるな」

当然彼らは、この世界でも魔物と戦う。そんな戦いを一つ終わるとダンジョーがふと呟くとムラサキもそれに頷いた。

「あー確かに。なんかここの魔物と比べると、アタシらんとこの魔物ってかモンスター？　なんか……安っぽいよね」

「安っぽい……ですか？」

「そ、安っぽい」

「こちらの世界の魔物は、戦ってる実感を強く感じられるな！　戦士としては、中々いい気分だ！　わはははは……っ！」

「まああの安っぽいモンスターと比べたらね」

「……なんか、想像できねえな」

あの安っぽい感じを口頭で説明するのが難しく、結局ルリア達は首をひねるばかりだった。

一方メレブは、もどかしさやら色んな感情を抱え悶え首をひねっていた。

「ん〜！　うむ〜！　あんま、あんまり触れるなそこにい。比べてくれるなあ。色々大人の……大人の事情があるのだからさあ」

「……安っぽかるうが、迫力があるうが人々を襲う魔物に変わりはない。我々は勇者としてそれを倒すのみです」

「お、ヨシヒコ良い事言った」

——そして時に仏の教えに導かれる一行。

「ヨシヒコオッ！ ヨシヒコオッ！」

「うわ、出たデカいの!!」

「うわ……うわつて。うわつて君……きみ、きみ？ 君誰そこ、そのちつこいの」

「オイラはちつこいのじゃねえ！ オイラはビイつて言うんだい！」

「あ、ビイ君。ビイ君ね……はいはい、よろしくね……。でね君ね、ビイ君あのね君ね、人が出てきて直ぐ顔見て、うわっ!? ってないんじゃないかな？ 仮にもね、仮にも仏に對してさ。いや仮つて言うか実際に仏なんだけどね」

「いや知らねえよ……」

「知らな……ええ。そりや、そりやねえぜビイくうくん」

「出て速攻落ち込んでんじゃねーよ仏ええ！」

「出て来たなら早く情報よこせよー」

「あら、あらあら……ホクロにムラちゃん酷いのねえ。異世界まで来ても、仏に当たり強い相変わらずー！」

「いいから！ 情報！」

「はーい、わかりましたあー。言いますうー」

——仏より使えるのか使えないのかわからない、いい加減でザツクリした情報を与えられ冒険を続ける一行。

「中々見つかりませんね。伝説のアイテム……」

「あの仏って奴の情報、本当にあってんのかよ」

「ごめんねえ二人共。あのクソ仏マジでいい加減だからさ」

「まあ手掛かりと言えるのは、仏のお告げのみだからな。ここは信じるほかあるまい」

「……さて、異世界でありながら相変わらず仏への不信感を募らせつつも、新しい呪文を思いついた私だよ」

「本当ですかメレブさん……ッ!?!」

「す、すごいです!」

「……なあ、メレブの奴の呪文って確か」

「うん、全然使えない」

新たな呪文を思いついたメレブに対して感心して興奮するヨシヒコとルリア。だがそれ以外の者は冷めた様子だった。中でも呆れた様子のビイの言葉にムラサキは、酷く冷たく無関心に答えた。

「ふふ、うふふ。これはすごいで、異世界で思いついた最新呪文だからね」

「どんな呪文なんでするかメレブさん。一体どんな呪文なんですか……!」

「落ち着けヨシヒコ……。これは相手の行動を阻害できる強力な呪文だよ」

「おおっ!」

「す、すごいですねメレブさん!」

「期待しちゃ駄目だよルリアちゃん。こいつこう言つて呪文役に立った試し無いから」

「そんなこと言つちやうムラサキに……。ほいつ!」

「あ、テメーまた勝手にっ!」

突然メレブに呪文をかけられたムラサキ。すると……。

「どうだ、ムラサキ?」

「……いや、なにも起き、ききき、うおうおうおおくくくっ!」

「なんだとっ!」

「よしっ!」

ムラサキの体がブルブルと震え始め声まで振動し始めた。驚愕するヨシヒコ、ガッツポーズをするメレブ。

「ててて、てめえ! なな、なにすんすんだよよよっ!」

「ふふ、ブルブル震えて聞き取りにくいね。うふ、うふふ。宇宙人の声みたい」

「どういう事だメレブ? これは、どんな呪文なんだ?」

「うむ……この呪文をかけられた者は、寒くも怖くもないのにブルブルと！ それもブルブルと震えて震えて止まらなくなる！ ゆえに私は、この呪文を……『ブル』、そう名付けたよ」

「す、すごい……！」

驚愕し続けるヨシヒコ。だがそれ以外の面々は、まだ冷めた様子である。

「……え、えつと震えるだけなのか？」

「甘く見るなビィ君！ 考えてもみよ……戦闘中に体が震えだしてしまうのだよ？ 震え方も授業中のスマホ着信バイブレーションどころではないぞ！ 見てみよこのムラサキの震えっぷり！」

「ててて、てめえ！ いい、いい加減げんげん、にににつ！ これとけ、解けけけ、とつとつけけけっ！」

「あはっ！ 下手糞なDJのスクラッチみたいになつてる。針擦り切れちゃうよ、針」
「すごい……まるで分身してるかのように震えている!? こ、これでは真面に剣も握れない！」

「そうだヨシヒコ。ブルをかけ相手がブルブル震え武器も落として動けない所をおく……ズバリッ！」

「無敵ですっねっ!!」

「ふふ」

「いや、無敵ではなくねえか？」

ビィの指摘も聞き流しメレブは話を続ける。

「しかもこの呪文、さらに強力な呪文に進化するよ」

「なんですって……！」

「ブルから進化シラブル、グラブル……そして最後にはグランブルー！ もうそうなる

と呪文は、複数の相手にかかるし震えの強さたるや……もう！ もう今のムラサキどこ

ろではないぞ！ ブル、ブルブルしっぱなし！ エターナルフォースブルツ！」

「か、かけて下さいメレブさんっ！ 私にもその呪文をかけて下さいっ!!」

「ヨシヒコ、異世界でも相変わらずのかけられたがり」

何故か呪文をかけられたがるヨシヒコ。すると更に団長までも「自分にもお願い！」

と手を挙げた。

「おっとまさかのヨシヒコタイプが異世界にも」

「いやなんでお前までかけられたがるんだよっ!!? 震えるだけだぞ!!」

「団長さん……共に、共にブルを！ 共に震えましょう！ お願いしますメレブさんっ

！」

「いいよー！ ブルツ！」

突っ込むビイを無視するとヨシヒコと団長の体がブルブルと震えだした。

「おおっ！ うおおお、うおうおうおおっ!? すごい、ブルブルふるえ、ふるふる、ええええっ!!」

「なんだってこんな呪文かけられたんだ……」

「うむ、ビイ君。ヨシヒコとはそう言う男だ。団長もそうなのだろう」

「ええ……」

団長と二人で震え盛り上がるヨシヒコ。呆れるばかりのビイに慣れた様子のメレブ。

「つつつつ、つかこっちいい加減解けけけっ!」

「しかたあるまい……ルブツ!」

「……っ！ お、おお。収まった」

「どうだ恐ろしかろう」

「いや普通にしょーもねーから」

「け、けど戦いの最中に使えば、使え……るんじや? ないでしようか!」

「聞いたかムラサキツ! 聞いたかつ! ルリアちゃんの純粋な言葉を! やはりわか

る子にはわかるのだ。私の呪文の価値をわかってきている!」

「気いつかわれてんだよ、わかれ」

「……ブル」

「あ、てめまた……ああ、あ、あ、くもうっ！ ふるええ、あああくくくっ!!」
 「さらにスイーツ！」

「ふざけ……っ!? もおっ!? 甘いものののっ！ あまあま、甘いものくいたた、たい
 いいいいっ!」

「そこで震えながら甘いものを欲するがいいムラサキ」

「これで、ででっで！ 魔王うおうおうっ！ まおうをを、たおおせるぞぞぞお
 おおおくくくっ!!!」

「いや倒せねえって……」

震えながら雄たけびを上げるヨシヒコと団長。震えながら甘いものを欲するムラサ
 キ。この場は混沌としていた。

「……うーん、やっぱり使えそうな気が」

一人呪文の有効性を考えるルリアだった。

■ また時に空の世界の女性に恋に落ちるヨシヒコ――。

「おいヨシヒコ、お前異世界まで来て例によって惚れてる場合じゃないぞ」

「そうだぜ！ お前魔王を倒して元の世界に戻るんだろ!」

「……しかしあのドラフの女性は、夫に先立たれ一人子を育てて日々大変な苦勞をして

いる！ 誰かが、誰かが支えてあげなければならぬんですっ！」

「それはお前の役目ではないだろうヨシヒコ」

「いいえダンジョーさん！ 私は彼女を助けたいんですっ！ あの奥さんと子供を助け

たい……！！ それに！」

「それに？」

「あ、やな予感する俺」

「あたしもー」

「それに……っ！ 彼女の胸はポインなんだっ！！」

「ほらきた」

極めて情けない事を大声で叫ぶヨシヒコ。

「ドラフは凄いですっ！ 元の世界にはない夢が……希望があ胸に詰まってるっ！

ドラフのおっぱいは凄いですっ！！」

「……気持ちわかる」

「おっさんサイテーだな」

「私は一分一秒でもあのおっぱいと共に居たい、この時間でさえ惜しいんです……っ！

私はあの胸を支えたいんだっ！」

「おい、あいつ彼女じゃなくて胸支えるって言ったぞ!？」

「胸揉みたいだけじゃねーか!？」

「揉みたくて何が悪いっ!？」

「ひどい、酷過ぎるぞヨシヒコよ……」

「私はこの空の世界で彼女と共に暮らします。あのおっぱいと共に暮らせるなら……もう元の世界なんてどうでもいいっ!!」

「はい出たー」

更に情けない事を叫びだしドン引きされるヨシヒコ。

「魔王などもっとどうでもいいっ!!」

「ヨシヒコ……お前ヨシヒコ……、そんな情けない事を叫ぶな勇者あく……」

「てめえヨシヒコオツ!! 世界の危機よりもボインを取るっのかよお!？」

「当たり前だムラサキツ!!」

「い、言い切りやがったコイツ……!」

勇者にあるまじき発言に愕然とする一行。

「胸のないお前とは違うんだムラサキ、お前にあのボインがあるのかっ!？」 お前に夢と希望があるかっ!？」 お前の胸にそれがあるのかっ!？」 胸のないお前にそれがあるか!？」

「てめえマジぶつ殺すぞ!？」

「言い過ぎ、言い過ぎよヨシヒコ。地味に流れ弾がルリアちゃんに来てる」

「……………」

「ル、ルリア……？ そんな落ち込むなよ？」

ガチギレするムラサキに落ち込むルリア。どうしようもない状況にフオーに慌てるメレブやビィ達。

その後本気で魔王を退治せず異世界に骨を埋めようとしたヨシヒコは、ガチギレした仏の仏ビームによりボインの記憶を抹消され正気(?)を取り戻した。

■
そんな調子で旅を続け、ついに元の世界に帰る手がかりと倒すべき魔王の居城へとたどり着いた一行。

だが魔王の力は凄まじく、ヨシヒコ達は追い詰められてしまう。

「だ、大丈夫かよヨシヒコ!？」

「た、大変ですメレブさん達も……！ このままじゃ……！」

強大な魔王を前に怯むビィ達——だが、この場には勇者がいる。

「——私は、私はまだ立っている！」

勇者ヨシヒコがいる。

「ピンチなど幾度も超えた！ 私はヨシヒコ……勇者ヨシヒコ！ どんな強大な敵であろうと、私が勇者である限り絶対に負けない！」

勇者ヨシヒコは、世間知らずで騙されやすい、人を疑う事をしらず、天然で、スケベな愚か者かもしれない。

だが彼は勇者だった。生まれも使命も関係ない、仏のお告げさえきつかけに過ぎない。彼がどんなピンチでも最後まで諦めず幾度も強大な力に立ち向かい続けたからこそ、自分自身でそうあろうとしたからこそ勇者なのだ!!

「悪しき魔王よ！ 覚悟おとおお——つ!!」

——この物語は、後に空の世界でも語られる一人の勇者と仲間達の冒険譚。『勇者ヨシヒコと蒼穹の島』、これは数ある彼等の物語のほんの一部でしかない……。

「——兄様……ヒサは、ついに騎空士となりました！ これで兄様達の騎空団に入団できますー！」

キン肉マンVS星晶超人 空の世界で大決戦!! の巻

——これは、ある世界の地球で起きた“超人”達と呼ばれる者達と“完璧超人・始祖”と呼ばれる者達との熱く激しい歴史的戦いから少し経ってからのことである。

正義超人の一人であり“キン肉王家、第58代キン肉大王”であるキン肉スグル——またの名を“キン肉マン”。彼とその仲間達は、先の戦いの傷を癒す日々を過ごしていたが、この時を狙う悪の超人もまた存在している。

「おわあ~~~~~っ!? な、なんじゃこの穴はあ——っ!?」

「お、王子い——っ!?」

突如、キン肉マンと相棒ミートの前に開いた謎のワームホール。それは激しい吸引力で二人を飲み込んでいく。

「おおっ!? キン肉マンとミートが!!」

「待っていろおっ! 今助ける!」

その場に居合わせたテリーマン、ウォーズマンなどの仲間の超人が咄嗟に二人を助けた。だが彼らの腕が届くよりも先にワームホールは閉じてしまった。

「ダ、ダメだ！ 閉じてしまった……!!」

「二人はいつたい……どこへ……っ!!」

残された超人、消えたキン肉マンとミート。

「う、うむう……。一体全体私らはどこへ来てしまったのうミート……」

「ボクにもさっぱりですよ王子……」

「そ、それにしても……ヒエツ!? この高さ、落ちたらひとたまりもないのうミートよ」

「王子飛べるじゃないですか……一応」

これは、この先^{オメガ・ケンタウリの六輪客} 未来に起こる更なる戦い^客を知らぬキン肉マン達が自分達の世界と

空の世界……それら二つを繋ぎ混乱を呼ぶ謎の超人との戦いに挑む物語である——。



謎のワームホールによって突然異なる世界へと飛ばされたキン肉マンとその相棒ミート。彼らは島が空に浮かび人々がそこで暮らす世界で困り果てていたところ、騎空士を名乗る少女ジータとその仲間ルリアとビィに出会う。

「いやあく！ 助かったわい！ 右も左もわからぬ所に放り出されて困っていたんじゃ

！ 名乗るのが遅れたな、私はキン肉マン！」

「ボクは王子のお目付け役、ミートと言います」

「キン肉マンさんにミート君ですか」

「またなんか妙な連中だなあ……」

半裸のマスクマンに、子供のお目付け。奇妙なコンビにビィは首をひねるがルリアは、特に怪しむ様子はなかった。

「ともかく別の世界からか……なんか多いなそう言うの」

「なんじゃ、私達以外にもこの世界に来ておるのか?」

「ああ、色々とな。まあキン肉マンとことは、また別の世界だと思っぜ? どうもオイラ達の世界つてのは、色々呼び込みまうみてえだよ」

互いに打ち解けたキン肉マン達は、自分達が突然この世界に連れてこられた事を話し、ジータ達もまた最近自分達の世界でも妙な事件が起きていると言う。

「確かに、最近オイラ達の世界でも変な事件が増えてるな」

「王子、これはボク達の世界と何か関係があるんじゃないでしょうか?」

「うゝむ……私にはさっぱりわからんわい」

ジータとその仲間だるビィやルリアと互いの情報を交換すると、キン肉マンがこの世界に来る少し前より奇妙な襲撃事件が起きている事に気が付く。

事件は全て「デュエリスト」と呼ばれる戦いによるシヨを生業にする者が突如襲撃を受け大怪我を負わされたと言う。それも短期間のうち各地で。

それぞれ関係のないと思われた事件は、全ての犠牲者の負傷が必ず「同じ技によつて

出来た負傷”であるため同一犯ではないかと疑われだしていたのだ。

ミートはこれが自分達を呼んだ存在の仕業ではないかと考えた。ワームホールを使えば、一瞬で島から島へ移動しデュエリストを襲う事が出来るからだ。

謎の存在と帰還の手がかりを求め、キン肉マン達はジータ達に協力を求めつつ彼女達の手助けも行いながら、次に狙われるであろうデュエリストの集まる艇“ジュエルリゾート”へ訪れた――。

■

「おお~~~~っ!? これは正に“リング”ではないか——っ!?」

「これが“デュエル”と呼ばれる催しだそうですよ王子」

シヨーと言えど真剣勝負。デュエリスト達の熱い戦いにキン肉マンとミートは、ギャラリーの熱狂に混ざり興奮しながら観戦した。

「見るミート、あのファステイバと言う選手！ あの角と言いまるでバツファローマンの如き気迫じゃあ~~~~!!」

「ドラフと言う種族の特徴だそうです。流石に“ハリケーンミキサ”はやらなそうですね。むしろ……王子と似たタイプのファイトスタイルですよ」

「うゝむ、これは私の超人魂にも火がつくわい！」

リングの上で戦うドラフ族の“漢女”ファステイバ。彼（彼女）は、ジータの仲間で

もあり、その縁でキン肉マンはファステイバと直接話す事ができた。すると二人は、直ぐに意気投合。ファステイバの提案で、この日直ぐキン肉マンはファステイバとエキシビジョンマッチとして一試合戦える事となった。

興奮のままにキン肉マンは、リングへと上がる。異世界で開催される特別試合に、熱狂の歓声が上がった。

「ふんっ!!」

「でえい!!」

組合から始まった熱い攻防。キン肉マンの身長185cm、対してファステイバの身長202cm。ドラフ男性としては、低いとも言われるファステイバであるが十分に巨漢である。身長180オーバーのキン肉マンと言えどもともに組んでは不利であった。

だがこのキン肉マン、伊達に数々の名立たる超人と戦ってきていない。不利な組合をさけつつ打撃でダメージを与え、確実に勝機を狙い攻め続ける。

(一度の組み合いでわかるぞ……!!) ファステイバとやら、やはり手加減して勝てる相手ではない。異世界とは言え「超人では無い」等とはとても言えん!! ……ちよつとオカマラスみたいと思って悪かったわい)

「なんと凄い攻防だあ——ツ!! 突如開かれたこの試合、”超人”を名乗る男キン肉マン!! あの手アステイバの攻撃を避けて耐えて、そればかりか確実に攻めていく……つ

!! “キン肉”の名は伊達ではないのかあ——!!

(キン肉マン……!! すごい人だわ、これが異世界の“超人”!! けど……アタシだつて負けないわよ!!)

「しかし、しかしやはりファステイバ負けていなく……いつ!! 超人に負けぬとばかりにこちらも攻めるう!! 一つ一つ愛にあふれる攻撃でキン肉マンを包み込むう……!!」

「うう……! ど、どつちを応援すればいいんでしょう……!」

「こうなりやどつちも応援するしかねえよルリア!」

「そ、そうですねビイさん! ファステイバさーん、キン肉マンさーん!! どつちも頑張ってくださいあ……いつ!!」

闘いの中、二人の中には熱い闘志が漲り燃え盛った。その闘志の炎は、実況も熱くさせ大いに会場を盛り上げていく。

「ふんふん、せえええ——イツ!!」

「ここでファステイバ、チョップと拳の連打の猛攻つ!! これはキン肉マンも防戦一方かあ……いつ!!」

「はわわ!? キン肉マンさん大丈夫でしょうか……!」

「大丈夫ですよルリアさん。見てください」

ファステイバ巨体を生かしたパワーあふれる猛打、猛攻。その光景にキン肉マンを心配するルリアだったが、ミートは焦る様子を見せずキン肉マンを指さした。

「お、おい……!! キン肉マンの奴!!」

「ここ、これは何という事だ——っ!? キン肉マン、あの猛攻を受け微動だにせず耐え続けているう——ッ!?」

ビイが驚き、実況もまた驚愕の声を上げた。普通のデュエリストなら膝をつき、ダウンさえしそうなファステイバの猛攻を前にキン肉マンは、両腕で顔を隠す防御態勢で耐えているのだ。

一見すればただの“ピーカブースタイル”。だがキン肉マンの使うそれは——。

「あれは、“肉のカーテン”。キン肉一族に伝わる伝承を元に、先々代大王であるキン肉タツノリ様が編み出した防御法です!」

「肉のカーテン!?!」

キン肉マンの得意な防御スタイル。この肉のカーテンで彼は、なんども苦しい戦いを耐えて勝ち抜いた。

これにはファステイバの方が参ってしまい、攻撃の連打が止んでいく。

「キン肉マン!! 肉のカーテンなる防御法でファステイバの猛攻を耐え抜いたあ——

——ッ!?!」

「な、なんて防御なの!? 上半身だけじゃなく、下半身にもダメージが入らないわ!」

「鉄壁防御の肉のカーテン! そう易々と敗れんわい!!」

「そのようなね。けど……っ!!」

連打をやめたファステイバは――。

「どっせええええ――いいっ!!」

「おわああ――ッ!」

ガードしたままのキン肉マンに向かい、渾身の力を込めたラリアットをぶつけた。その勢いとパワーは、肉のカーテンを解いていないキン肉マンをロープまで吹き飛ばしたのだ。

「ああ!? 肉のカーテンの状態の王子を!? なんてパワーだ!!」

「け、けどあの防御ってよう、パンチとかの打撃はともかく押されたり投げられたりには、実際のところ無防備じゃねえのか?」

「い、いえ……。肉のカーテンは、その実ただのガードではなく、相手の攻撃エネルギーを吸収、体の硬化などキン肉一族の王子だからこそ発揮する力があります。並みの力ではああも容易く吹き飛ばされたりしません……」

ファステイバの「カーテン破り」にミートも驚きを隠せずにいた。そしてファステイバは、その勢いのまま必殺技へと移っていた。コーナーポストに上がり、さらにそ

ここから跳躍。ロープに弾かれ戻ってきたキン肉マンへ向かっていく。

「行くわよ!! これがアタシのフェイバリット——」

「来た——つ! ここで愛の一撃イ——ツ!!」

「ラアアアア——ブツ!! サープ・ボンバアアア——ツ!!」

「ぐおわあああゝゝつ!」

強烈な飛び蹴り。ドラフの体軀から繰り出されるコーナー最上段からの片足ミサイルキックは、肉のカーテンを解いたキン肉マンに見事直撃。またも吹き飛ばすキン肉マンは、そのままリングへと叩きつけられた。

「決まったアアゝゝゝつ!! これは綺麗に入ったあ——!!」

歓声が上がった。誰もがファステイバの勝利を疑わなかった。

「ダウン、ダウンゝゝン!! これはもうキン肉マン立てな……い、いや!」

リングにダウンしたキン肉マン。直ぐにもレフェリーがファステイバの勝利を告げると思われた。しかし、会場で聞こえたのはその判定を告げるのではなく、驚いた実況と観客のざわめきであった。

「グ、ムムウゝ……! きよ、強烈な技だわい……」

「なんと……キン肉マン立ち上がったあああゝゝゝつ!! あ、あのファステイバのフェイバリットを受け、立ち上がった者がかっつていたでしょうかあゝゝつ!!」

キン肉マンは立ち上がった。なお闘志を宿した瞳は、まっすぐにファステイバを見ている。

「さあ……次はこちらの番だあ——!!」

次に仕掛けたのはキン肉マンだった。強烈な必殺技を食らったにもかかわらず、素早くファステイバへと向かい突進。ぶつかり合うと同時にファステイバを突進の勢いで持ちあげる。そしてそのままブレーションバスターに似た体勢へと持っていき、ファステイバの両足をつかみ固定。

「今度は私のフェイバリット!! うおおお——ツ!!」

「これはあ——ツ!? キン肉マン、なんとファステイバを肩にかかえそのまま高く飛び上がるうううううう!!」

超人ゆえの跳躍力。巨漢ファステイバをつかみ抱えてなお飛び上がったキン肉マンは、そのままリングへと降下を始める。

「必殺つ!! キン肉バスターアアアアアア——ツ!!!」

「ぐ、ぐふう……つ!?!」

キン肉マンがリングに落ちた瞬間、正に、文字通り激しい衝撃が会場に走った。

キン肉バスター、相手を叩きつけるような技に見え、実際はその関節をも痛めつけるキン肉マン“48の殺人技”の一つである。

キン肉マンが両手を離せば、ファステイバがそのままリングへと落ちダウン。会場が静まりかえった。だがそれは悲壮感のないものだ。誰もがファステイバを信じ待っているのだ。そして、それはキン肉マンも――。

「…………ぐ、ぐう!! ほ、本当に……………凄いわね。キン肉マンさんって!!」
「おおっ!!」

ファステイバが立ち上がった。その瞬間大きな歓声が上がる。

「立った、立ちましたああ!! やはり、やはり我らのファステイバ強い!! 凄いタフネス!! キン肉マンの強力な必殺技を見事耐えましたああ……………っ!!」

「ははは…………… 凄いのはおぬしの方だファステイバ。すごい、本当に凄い。キン肉バスターを耐えるどころか、まだ余裕があると見える」

「やあね、アナタだって。アタシの技を耐えたくせに余裕そうじゃない」

「馬鹿言っちゃ困る! 私はもうへ口へ口だわい!!」
互いに余裕を感じさせるままに構え向かい合う。

――が、ここでタイムアップ。

「あ…………と! ……ここで時間です。タイムアップ!!」

「む?」

「あ…残念…………」

「両者向かい合いまたも激しい攻防が始まると思われましたが、結果は『引き分け』となりません」

引き分け、その結果に会場の観客は残念なようなホツとしたような様子だった。

急遽行われたエキシビジョンマッチゆえ、この試合は通常より時間は短めであり延長もないのだ。

「いやはや、おぬしと言いいジータ達と言いい空の世界の住人……下手な超人以上と言う他ないわい!!」

「アタシも異世界の超人さんと試合が出来て楽しかったわ! 次は是非エキシビジョンマッチじゃない正真正銘、勝つか負けるかの真剣勝負でね!」

「それは私も望むところっ!!」

二人は熱い握手を交わした。そこには、短い時間であっても確かに芽生えた『友情』があった。単なるエキシビジョンマッチとは思えぬ試合に、ルリア達も観客達も二人を称える歓声を上げたのだった。

「——セハハア~~~~!! なるほど……キン肉マン。思った通りの男よのお~~~~」

■ そんなキン肉マン達を見る不穏な視線、それに気付くことなく——。

「そーういや今更だけどき、キン肉マン」

「こうですが、つてミートまで……」

「事実、王子は我々の世界にあるキン肉星のキン肉族の正式な王位継承者です」

「うーん、ミートが言うなら本当ってことか」

「ビイ？ おぬしほんと遠慮ないのう……」

「もつと正確に言うと、キン肉王家の58代目大王になりますね」

「だ、だだだだ大王さんなんですかつ?!」

「そのとおろろり!! 私キン肉スグル、キン肉大王なのです!!」

「……みえねえろろろ!!」

「だから本当じゃつてば!! ビイ君てばもおろろ!!」

——また時に、異世界の料理の話に花咲くこともある。

「そう言えば、この世界では“米料理”があまり無いようじゃのう」

「お米、料理ですか……?」

“むしやむしや”と食堂で食事を楽しんでいる時、パンを手にキン肉マンがふと呟いた。

「別に普通にあるぜ?」

「いや、まあ確かに無いとは言わんが」

「ボク達の住む国は、お米が主食なんです。だからどうしても王子は、それが恋しくなる

んですよ」

「うむ、何よりも『牛丼』だ!!」

「牛丼?」

「何を隠そう私キン肉マン!! 全日本牛丼愛好会会長であるのであゝゝるっ!! あ、牛丼一筋、三百ねゝん!!」

どこから取り出したのか、丼を両手にもって踊りを踊るキン肉マン。それを無視してビィ達は話を続けた。

「牛肉と玉ねぎ、それを醤油や砂糖で甘辛く煮込んだものをご飯に乗せる。それが牛丼ですよ」

「な、なんか聞くだけで美味しそうだな……」

「はい……食べてみたいですよ」

「似た材料があれば作れますし、今度試しに作ってみましようか?」

「いいな! 異世界の料理ってのも気になるぜ!!」

「……あら? ミート、ビィ、なにか話がまとまったのか?」

「もう、王子が話し出したんですよ……!!」

踊り終わってふとビィ達の会話に気が付き話に置いてきぼりのキン肉マンは、キョトンとしていたのだった。

■ 空の世界の住民と交流を深めつつ、謎の存在と事件の真相を探るキン肉マン達は、デューエリストの間で「戦いの神」として信仰されるある星晶獣の存在を知る。その星晶獣に伝わる話が、まるで超人のようであると気づいた彼らは、それが祀られる地へと向かった。

だがそこで待ち構えていたかのように顕現し現れた星晶獣は、驚愕の事実を彼らに教えた――。

「セハハハハ――ッ!! 待って居たぞキン肉マンよ～～～～!!」

「な、なんと私の名を?!!」

戦いの神と呼ばれた星晶獣の姿を残したと言う石像。それが突如弾け砕けたかと思うと、その中より正に石像とうり二つの星晶獣が現れたのだ。

「キン肉マン、始祖達と無量大数軍と戦った貴様ならば知っているだろう! かつて古代の時代、かの神々によって滅ぼされた超人達のことを――ッ!! 私はその際偶然にも開いたワームホールにより、霸王戦争時代のこの空へ飛ばされた超人なのだ～～～～ッ!!」

「そ、そうか……! ザ・マンが始祖達を助けた時、そのために天と地の狭間に特殊な次元が作られたと聞きました……! その空間が開いた影響でこの世界に通じるワーム

ホールが偶然開いたんだ!」

「だ、だがミートよ! それはおかしいではないか〜!? 団長達にも聞いたがその、
“歯くせー戦争”とやらは、数百年前!! 奴がいたのが始祖と同じ時代ならば、ようわか
らんが私達の世界と時間の流れがまったく合わんのではないか!?”

「いえ、世界を超えらると言うのは予想外の事が起きます。まして偶発的なものでは、大き
な時間のズレが生まれても不思議ではありません!」

「そ、そう言うものかのう……?」

「予想でしかありませんが……。あと王子、
“歯くせー”でなく“覇空”ですよ」

「セハア〜! その通りだ〜アリキサンドリア・ミートよ——!! 流石キン肉マンの
お目付け。その頭脳は伊達では無いな〜」

「ボクの名前まで!?”

太古より生きる謎の超人。彼が完璧超人の始祖達を知っているのも不思議であった
が、こちらの世界に移動しにキン肉マンとミートの事までよく知っている様子にミート
は驚きを隠せずにいた。

「あ、あなたはいつたい? 始祖達ばかりかボク達までも知っているなんて……この世
界にいたと言う貴方がどうして……!」

「セハハハ……ッ!! あの時、覇空戦争と呼ばれる戦乱の時代に飛ばされた私は、超人と

言う異界の種族に目を付けた星の民により……無理やりこの身を星晶獣へと変えられたのだ……!! 散々望まぬ戦争に繰り出されもしたさ……!! だがそのお陰で私は今この時代にまで存在し力を高め……やつと元の世界へと干渉し物質の移動が出来るようになった!! 故に元の世界の出来事を覗き見るも容易!! 貴様達をこの世界に呼んだのは、私自身の世界移動のための実験にすぎ——んっ!!」

「じゃ、じゃあ……デュエリストさん達の襲撃事件は……!」

「永き眠りより覚め、久方ぶりに顕現した我のウォーミングアップのようなものよ!」

「やいやい! そんな事までして、おめえの目的つてのはなんなんदै!」

ビィの問いに超人は、高笑いを上げた。

「セーッハッハッハ……ッ!! 知れたことよ……今こそ私は元の世界へと戻り、かつての超人絶滅を起こした神々への復讐を行う!!」

「ふ、復讐?!」

「左様!! あの忌まわしきカピラリアの光により滅びた我が同胞達の無念のためにつ!! それこそが、超人を超え神の如き星晶獣となった私の…… “星晶超人” である私の使命なのだ——っ!!」

「ゲエ——ッ!! 星晶獣の超人……!?!」

かつて世界を超えた超人は、星晶獣となり長き時の中で復讐に取りつかれていた。

「……言われたように私もかつての神、ザ・マンその人や始祖達からその事を聞いていてる。だがあなたのやり方は——」

「間違っていると言うのかくくく!? 同胞を全て滅ぼされ、見知らぬ世界へ飛ばされ、たった一人生き残った私に対して—— ツ!!」

「そうだ、間違っている!!」

キン肉マンは、星晶超人の祀られる祭壇であり神聖なるリングでもある場所へ飛び乗り叫んだ。

「私はあなたのやろうとしている事に、どんな理由があろうと『間違っている』と言わねばならない!!」

「ふんっ!! 若造が吠えよる!! ……だが、邪魔をされるのも煩わしい。貴様を我が復讐のため、ウォーミングアップの仕上げの相手にしてやろうか?」

「受けて立つ。あなたの行いの先、新たな戦いによる悲劇が生まれるのならば止めるのみ!!」

「……やはり、正義超人よ!! であるならば——」

リングへと立つ星晶超人。二人の超人は、今空の世界のリングにて対峙した。

「最早言葉は不要よなあ!!」

出るか、必殺キン肉バスター!!

「頑張れよ——!! キン肉マ——ンツ!!」

「負けないでください……!!」

「アタシ達もついでるわよっ!!」

燃えろ、火事場のクソ力!!

「——へのつつぱりはいらんですよ!!」

戦え、炎のキン肉マン!!

グランブル〜ファンタジ〜によ!!

年に結構な頻度で何かと色んな世界から色んな人やメカやらがやってくる空の世界。

今回もまた、愉快な世界から愉快な住人が現れたらしく……？

■ いち よによによによによつ!

■ 「ブ〇ツコリーによつ!」

「でじこなにしてるゲマ?」

「によくただ久しぶりに恒例の台詞を言ってみただけだによ」

「一部〃〃で消されてるゲマ」

「分からない人からすれば野菜で済むけど、でじこのネームバリューを考えたら社名つてわかっちゃうによ。そのまま出すのは、憚られると言うものによ。人気者はつらいによ」

「ほとんど隠せてないゲマ」

「おめえらなにしているにゆ」

「おやぶちこ。軽い挨拶してただけだよ」

「にゆ」

「と言うわけで本編開始によっ!!」

「ただの小ネタにゆ」

■ に Welcome!

■ ある日突然現れた三人（二人と一匹?）。猫耳着けた二人の少女に黄色い球体。

気づいたらこの空の世界に来ていたと言う話を聞き、暫く彼女達を騎空団に迎える事を決めたルリア達だった。――。

「やれやれ、ちよいと前に『別んところ』とコラボをしたと思つたら次は、お空の世界とコラボかによ」

「ありがたいことゲマ。まだゲマ達の事をみんな覚えていてくれる証拠ゲマ」

「とは言えこうもあつちこつちに引つ張りだこじゃ疲れるによ。でじこの身体は一つしかないによ。普段から店長ちゃんのお手伝いで大変なのにこれ以上色んなところコラ

「ボしたらでじこ過労で倒れちゃうによ」

「贅沢いうなにゆ」

「しかもコレ書いてる途中で『令和のデ・ジ・キャラット』まで発表されたによ。今つて本当に令和なのかによ？ 実はまだ平成続いているんじゃないかによ？」

「メツタメタにゆ」

「でじこ普段から真面目に仕事なんてしてないゲマ……」

「でじこは見えない所で努力するタイプなんだによ」

「どうも緊張感の無い一行。」

「えつとそれで……アナタ達は一体？」

「おつと申し訳ないによルリア。唐突で設定もなにもない奇妙な状況に呆れてただけによ」

「ぶつちやけ過ぎゲマ」

「ともあれ自己紹介させてもらうによ！」

「そして、突如始まる自己紹介——『スタート！』」

「でじこはでじこによ！ デ・ジ・キャラット星出身の王女様によ！ 地球に着た時デ・ジ・キャラットって名前になってでじこって呼ばれてるによ！ お空の世界でもでじこと呼ぶによー！」

「ぶちこにゆ。ぶちこもデ・ジ・キャラット星から来たにゆ。本名はカプチーノだけど地球ではプチ・キャラットでぶちこって呼ばれてるにゆ」

「ゲマもデ・ジ・キャラット星出身ゲマツ！　ワガママなでじこのお目付け役できたゲマツ！」

「お、おう……随分早口な自己紹介だなあ」

「懐かしき劇場版のやりかたによく。あと念のため言っておくと所謂『ワンダフル版』準拠によ！　『ぽによぽによ』でも『によ』でも『ウインターガーデン』でもないによ！

けどどれも名作だから各々円盤買って全部見るによっ！」

「ダイナマイトマーケティンにゆ……ッ！」

「えつと……ワ、ワンダフル……？」

「さらに念を押すと『瞳は緑色』によ！　『赤』じゃないによ」

「なんか変なの連れてきちまったなあ」

「申し訳ないゲマ」

「ま、暫くよろしくだによ」

「にゆ」



さん　タイフーンアイドル

独特の雰囲気猫耳少女達に驚くルリア達。それでもなんだかんだと馴染んでいき、今では戦闘にまで活躍するでじこ一行。

「目からビームツ!!」

見た目はかわいい少女が目からビームを乱射して行く姿は、なんともシユールであった。しかしその破壊力は、魔物を倒すには十分過ぎるものである。

——そう、十分 “過ぎた” のである。

「うおおおおああああああ——ツ!?!」

「ラカムウウウ!!!」

「おっと、しまったによ」

彼女のビームの爆風やらで魔物は大抵吹き飛ばされ空に “キラリッ!” “と星と なっていった。

ついでにラカムを巻き込んで。

「無事かあ!?! ラカム!?!」

「おお……な、なんとか……」

「スマンによラカムん。ちよいとでじこ様のビームが強すぎたようだによ」

「いや、強すぎるとかの問題じゃないゲマ!?　なんどラカムさん巻き込めば気が済むゲマでじこ!?」

彼女の目からビームにより、ラカムが吹き飛んだのはこれで10回を超えていた。実によく巻き込まれる男である。

「ぶちこも活躍してるにゅ……!」

そしてぶちこの方は、彼女も戦闘に参加こそしてるがでじこのような活躍をしてるかと言うと少し違う。

彼女もまた「目からビーム」と叫び、目からビームを出そうとするが、その度出てくるのはビームではなく形状しがたい蠢くナニかである。ビィ曰く「カタリナの作った料理に似てる」とのこと。

ではこれが失敗かと言うと、さにあらず。ドロドロ不思議生命体は、その場で蠢いたと思えば、目標の魔物を取り込みどこかへ攫っていくなど妙な活躍を見せる時はあった。

もつともぶちこにとって“ビームの失敗”である以上は、この活躍も不本意であるようだ。

「ちゃんとビーム出ないにゅ……:コラボで空の世界に来て、でじこみたいに撃てないにゅ……!」

「そんな落ち込むことは無いぞ。ぷちこ」

そんな落ち込むぷちこを抱きかかえるのは、カタリナだった。

「君のその気持ちだけでも十分なのだ。でじこのようにビームを撃てなくても、気にしなくていいんだよ」

「にゅ……カタリナ、ありがとにゅ」

「うむ、うーむ……しかし、ああ……っ！　ぷちこ、君は実に愛らしいなあ!!」

「おめえ、ちよいちよいムラタクみてえになるにゅ……」

なお妙にぷちこを気に入り溺愛してるカタリナの事を、ぷちこは似た感じの“ムラタク”なる人物と比べている。

「さて、魔物も退治したしグランサイファーに帰るによ。でじこは、とつても活躍したからお腹が空いたによ。でじこ様は、今日のMVPによ！　これは“ぐるりん”特製ホカホカごはんを所望するによ」

「なんて凶々しいんだ……」

「ごめんだゲマ、バイ」

ともあれこんな様子にも慣れたバイ達は、焦げたラカムを連れて艇へと戻るのがだった。

「——つてちよつと!?　あたしの出番はあ!」

「うわあ!?! だ、誰だあ!?!」

どっこいいうさ耳、突如セリフを割り込ませたのは、うさみみ付けたフリフリ乙女の少女。

突然の登場に驚くビィ達だが、でじこ組は慣れた様子。

「おや? うさだではありませんかによ」

「ありませんかじゃなーい! サブタイ的にあたしの出番じゃない!? せーっかく、うさみみ回してこーこまで飛んで追ってきたのよ!」

「相変わらずうさだは喧しいやつによ」

「うさだって呼ぶなあーっ!」

「……なあゲマ? こいつもおめえらの知り合いか?」

「まあそうなるゲマね」

「うさだにゆ」

雰囲気から彼女がでじこ達の知り合いと見抜いたビィ。そして案の定その通りであった。

「えっと、うさださんですか?」

「ノンノン、違うわお嬢ちゃん!」

「え、けど今……」

「今のあたしは、ラ・ビ・アンローズ!! キュートでセクシーな素敵なアイドルよん! ……呼びにくかったらラビアンって呼んでね!」

「本名はうさだヒカルによ」

「だからうさだって言うなあ!!」

「……で、オイラ達はどう呼べばいいんだ?」

「もちろん、ラ・ビ・アンローズ!」

「うさだでいいによ」

「どっちだよ」

「うさだによ」

「ラービーアーン!!」

「だからどっちだよっ!?!」

こうして新たに、うさだヒカル——「うさだって呼ぶなあ!」——ラ・ビ・アン・ローズが一行の仲間となった。

■ よん ぴよぴよぴよっ!

ある日、島で悪さをする集団を懲らしめて欲しいと依頼を受けた一行。そんな彼らが

行ってみると、そこに居たのは――。

「びよびよびよっ！ 今日もびよこ達ブラックゲマゲマ団の恐ろしさをおしえてやるびよー！」

「お任せくださいピヨコラ様！」

「お空の世界でも悪事はやめられませんなあ！」

「俺達悪の組織だもんなあ」

「……なあ、あれもしかして」

「あ、うん……ゲマ達の知り合いゲマ」

うんざりした顔のビーに気まずそうにゲマが答えた。

小さい少女に付き従い村で悪事を――落書き、調味料のすり替え、無銭飲食等々――どうもケチな悪事を働く集団。その名もブラックゲマゲマ団。でじこ達とは、因縁ある相手であった。

この日を境に空の世界でもでじこ達とブラックゲマゲマ団は、火花を散らすこととなる。

「だ、ダメですよ、びよこちゃん！ そんな悪いことしちゃだめです！」

「びよびよびよ……！ 残念だけどルリアおねえちゃんの言う事は聞いてやれないびよー！」

「その通り……!! 何故なら我々——」

——悪ですからなあ〜!!!

リク達一同そろって声を上げた。

「によく! 異世界まで来てびよこ達の相手なんてついてないによ! 付き合つてらんないによ!!」

「びよびよびよ……!! 令和のデ・ジ・キャラット始動で気合入ってるのはお姉ちゃんだけじゃないびよ……!!」

「我々ブラックゲマゲマ団もまた活動を再開しているのですっ!」

「言うなれば令和のブラックゲマゲマ団!」

「年号重ねてパワーアップだぜいっ! ……ところでコレ、具体的には何がアップしたんだ?」

「え? ……えつと、なにがびよ?」

「そうですね……経験とかでしょうか?」

「令和まで経験積んだと言えるほど活動してましたっけ我々?」

「そもそもレーワって何びよ?」

「ですからピョコラ様、それは——」

「おめえらゴチャゴチャうるさいによ! 問答無用の先手必勝目からビームツ!!」

「ああ!? まだ話してるとちゅ——」

何やら話が大いに脱線したびよこ達であったが、それに苛立ったでじこが無慈悲に高出力のビームをお見舞いすると、彼女達は哀れ「おぼえてろびよこ!」と叫び吹き飛んでいった。

「ひ、ひでえ……」

「不意打ちで撃ちやがった」

「勝利とは常に虚しいものによ」

「おめーが言うなよ」

あまりにも卑怯な勝利にビィとラカムはドン引きであった。

■
ご 暴れん坊さあ……!!

でじこ達の行動にルリア達もなんとか慣れてきた頃——。

「比較的平和だよな最近」

「ああ、この感じが続けばいいよな」

主な被害を受けていたラカムとビィがしみじみと空を見上げる。

「そんな言い方はあんまりによラカムん。でじこは常日頃騎空団のためを思って努力を

重ねているによ」

「その努力の度吹き飛ばされる俺の身にもなってくれ……」

「それはお約束つてやつによ」

「誰との約束だよ!」

思わずでじこを怒鳴るが彼女はどこ吹く風である。

そしてそんな平穩を壊しに現れるのは、黒ならぬ「青い影」――。

「ようようお嬢ちゃん達……お前さんたち、ちよいと腑抜けちやいやせんか?」

「なんだなんだ!?! 誰の声だ!?!」

何処から響く男の声。驚くビー達。

「この声なんか聞き覚ええない?」

「そう言えば覚えがあるゲマ」

「ゆーじうえだにゆ」

「こ、この声は……もしかや!?!」

だがでじこ達は、その声の主に覚えがあった。

「令和だからって……あの頃の熱いハートを忘れちやいませんか……?」

「やっぱり、お前は「暴れん坊」!!」

急に姿を見せたのは、青い色をした奇妙な人間(?)。その名も暴れん坊。

「またでじこ達の知り合いかよ!!」

「知り合いといえれば知り合いゲマ」

「急に現れるのよねこの人」

「神出鬼没にゆ……………」

人なのかも怪しい姿の暴れん坊を見てコメントに困るラカム達。だが暴れん坊は、そんな彼らを気にせず話を強引に続けた。

「たりねえたりねえ!! お嬢さん方にやあの頃の熱いハートがたりねえ……………足りねえよ おおっ!!」

「暑っ苦しい顔で叫ぶなによ!? そう言われてもでじこ達だってしばらく声付きで動いてないによ!!」

「声がなんだよ……………!! 元々CMの頃あ声なんぞなかったじゃねえか!!」

「何年前と思ってるによ!?!」

店長しゃんの下、某ゲのマのズで働いてた日々。それより少し前に覚えのあるコマーシャル。でじこも果たして何年前かももう直ぐには思い出せない。

「忘れちまったのかい……………デプラピョゲ坊」として活躍した日々を!!」

「なんだよ……………デプラピョゲ坊って」

「一時期組んだ暴れん坊とでじこ達のバンドによ」

「ベース三人とマンドリンとドラムと電電太鼓だけのバンドにゆ」

「活躍も何もしてないけどね」

「気の滅入りそうな曲弾きそうだな……」

「まずバンドなのかそれ……」

「全てはうやむやに終わつたによ」

もう何年も昔の出来事を懐かしむでじこ達。だが暴れん坊の暴れは収まらない。

「だつたらよ……思い出させてやりますよ。この暴れん坊があ……一肌脱いでお前さん達にあの熱い平成の時代をお!!」

「うわああ!? 巨大化したあ!?」

わけのわからぬ事を言い突如暴れん坊は巨大化。その身の丈は下半身が見えぬ程であつた。

「ガレヲンかおめーはっ!?」

「暴れん坊さあ……!!」

「決め顔で言うなによ!!」

「さあかかつてきなお嬢ちゃん達よお!! 熱い暴れを見せておくれよお!! あん時のよお……!! 平成秋葉のようなあつつい暴れをおおお——つ!!」

雄たけびを上げた暴れん坊は、その巨大な手を振り回し襲い掛かつてきた。

「によおおおお〜っ!? ま、まさかコイツがコラボーベのラスボスかによおお!?」

「暑っ 苦しいボスにゆ……」

「何属性になるゲマか……」

「召喚石粹かしら」

「によお〜……しかもコイツを倒さないとでじこ上限解放出来ない感じかによ……」

「コラボでたまにある感じゲマ」

「4アビは解放後にゆ」

「わけわからん事言っでねえで戦えっ!? グランサイファー墜とされちまうよ!!」

最終決戦 // VS 暴れん坊。果たしてその結末は、そしてブラック・ゲマゲマ団は

どうなった? でじこ達は元の世界に戻るのか?

「によ〜っ!? も、もう無茶苦茶によお〜っ!!」

謎を残しつつ、空にでじこの声が木霊した――。

勇者王ガオガイガー 空の勇者たち

■ ■
君たちに最新情報を公開しよう！

西暦2005年。〃この世界〃は、地球外からの脅威にさらされていた。

遙か遠くの星より現れた機械生命体〃ゾンダー〃。そして、それを統べる〃機会31原種〃。命ある星をすべて機械へと変える〃機界昇華〃を行い星々を滅ぼそうとする者達。

しかしこの星には〃勇者〃がいる！

ガッツイー・ギヤラクシー・ガード——通称GGG。ゾンダーと原種から人々と地球を守る防錆組織である！

「——さあ護、着いたぜ」

「うわっはあ！ ここのGGG研究所なんだね！」

「ああ、〃GGG新エネルギー研究所〃。多くの超エネルギー開発と研究を専門とする所さ」

——日本のとある施設。その近くに着陸した巨大な戦艦 “アマテラス” から降りて来たのは一人の青年と一人の少年。

獅子の如きオレンジの髪の青年の名は、獅子王凱。そして少年の名は、天海護。

この二人こそが地球を襲うゾンダー、そして原種と戦うGGGの一員である。

一見して普通の青年と少年でしかない二人だが、彼等は夫々無敵のサイボーグと未知の力を持つ超能力者なのだ。

この日、一時GGG本部から家へと戻っていた護を凱がむかえに来て戻る途中、もう一人この場所に迎えに来たのである。

「父さん、むかえに来たぜ」

「ああ、態々すまんなガイ」

獅子王麗雄——凱の父であり世界十大頭脳の一人に数えられる天才科学者である。

この研究所では、GGGが所有する神秘の結晶体 “Gストーン”——無限情報サーキットとも呼ばれるその生み出す超エネルギーの研究などが行われ、またそれ以外のエネルギーに関する研究も日夜行われており、その視察に彼は訪れており凱はそれを迎えに来たのだ。

「それで視察の方は、どうだった父さん？」

「うむ、みな良く頑張ってくれている」

「ねえ博士、ここではどんな研究が行われるの？」

「その通り。そもそもは宇宙開発公団の平和や環境改善に向けたエネルギー研究のために作られたものでな。じゃがゾンダーの出現を機にハイパーツールへの応用研究も行われておる。今は対原種に関するの物もな」

「それじゃあ、ガオガイガーがもつとパワーアップするの!？」

「いや、そこまでには至っておらんようじゃ」

「そうなんだ……」

麗雄の言葉に護は肩を落としたが、麗雄は「ハハハッ!」と笑った。

「護君、今も言ったがここは元々平和利用が目的の研究所じゃ。事実新たな再生可能エネルギーの開発や、それによる地球環境の改善など多くの成果が出ておる。Gアイランドシティでの生活でも既に応用されておるのだよ」

「え、そうなの!？」

「うむ。この研究所はな……今の戦い以上に、その後の平和を見据えて研究しておる。これも大切な戦いといえよう」

「そっか……それじゃ、早く原種を倒して平和にしないとね!」

「うむ!」

「その意気だぜ、護!」

施設を巡った二人は、平和への思いを改めて強くし、そのまま帰路につこうとした。だが、この時！ 既に原種の魔の手は彼らの目前に迫っていたのだ！！

「——ッ!? この反応!」

突如護の髪が緑色へと変わり光る。それに驚いたのは、その発光現象の意味する所を二人が知っているからだ。

「護!? まさか!」

「うん、ガイ兄ちゃん……原種だ!」

護が原種の存在を感知するやいなや、施設全体が地響きに襲われた。そして直ぐに研究所全体がまるで生命体の様に蠢きだしたではないか。

「研究所が變形してる!」

「なんとということじゃ!? これではまるで……『イズルデ』の時と同じ!」

「——見つけたぞ。GGGのサイボーグ、そしてカインの遺産よ」

「貴様は……『腕原種』!」

不意に凱達の後ろに現れたのは、身体を隠すようにマントを羽織り髭を蓄えた巨漢の男。

この男こそ凱達が打倒すべき原種の一人、特に31体いる原種の中でも『機界最強7原種』と呼ばれる内の一体であり最も凱を苦しめた原種——腕原種である。

「腕原種、ここで何を企んでいる！ またゾンダーメタルプラントを作るつもりなのか！」

「そうだ……と、言ったらどうする？」

「知れた事！ そんな事はさせん！」

「くくく……出来るかな？ 貴様に」

「待てっ!!」

腕原種は不敵に笑い変形する研究所に溶け込むように消えていった。その身体を研究所と融合させたのだ。

「奴め研究所と一体化する気か!？」

「ガイ兄ちゃん危ない!？」

「なにつ!! うわああーッ!？」

腕原種の行動を悟り慌てる凱。すると変貌し続ける研究所は、壁を変形させ凱と護達を分断するようにせり出した。

「父さん、護!？」

「安心しろガイ、僕達は無事じゃ!」

「良かった……なら待っててくれ！ 今すぐ助ける!」

凱は急ぎ壁を取り払おうとした。サイボーグとしての力を全開にすれば、普通の壁で

あれば壊す事は不可能ではない。だが、この壁は既に原種と一体化したものであった。

「くっ!? 壊しても壊しても、直ぐに再生しやがる!」

「凱、僕達にかまうなっ!! お前は直ぐに外へ出て急ぎギャレオンとフュージョンするんじや!」

僅かに空いた壁の隙間から凱に向かって麗雄は叫ぶ。

「何を言ってるんだ父さん!」

「この壁はハイパーモードのお前でも壊すのは難しい! それよりも原種を倒して研究所を元に戻すのが優先じゃ! このままでは研究所の職員も犠牲になってしまう!」

「しかしそれでは父さんと護は……!」

「ガイ兄ちゃん、僕は大丈夫! お願い、原種をやっつけて!」

「護君は僕が絶対に護ってみせる! だから早く!」

「……わかった! 父さん、護、絶対に助けるからな!」

凱は後ろ髪を引かれる思いのまま、麗雄と護を残し外へと脱出していった。

今度こそ宿敵腕原種を倒し護達を助けようと決意する凱であったが、この戦いが未知の世界に及ぶ大きな事件の始まりになるとは、この時の彼は知る由も無かったのである。



■ 異界の扉

腕原種の出現により変貌した研究所。そこには、研究所と一体化した腕原種がおり、機械の巨大な“腕”を蠢く機械生命体のように変貌した研究所から生やしていた。

そしてその巨大な原種へと立ち向かう一体のロボット。

「うおおおっ!」

胸に獅子の顔がある白い人型ロボは、元はライオン型のメカライオン“ギャレオン”がサイボーグである凱とフュージョンする事で変形したメカノイド・ガイガーである。

ガイガーは、腕の鋭い爪で原種に攻撃をしかけるがあまりにも大きさに差があり苦戦していた。

「フハハハハ……! そのような小さなメカノイドで適うと思うか!」

「くっ!」

「捻りつぶしてくれる!!」

巨大な腕がガイガーに迫ったその時。

「ダブルライフル!!」

「シャントウロンツ!!」

「むうっ!」

青と赤、緑と黄。二体の巨大ロボが攻撃を放つ。その攻撃は、ガイガーを押しつぶそうとした腕に直撃した。

「ご無事ですか、隊長殿！」

「助けに来たぜ！」

「来てくれたか、超竜神、撃龍神！」

彼等は夫々が氷竜と炎竜、そして風龍と雷龍と呼ばれる四体のロボットが合体して生まれる勇者ロボ超竜神と撃龍神である。

「ここは、我々が時間を稼ぎます！」

「お前はとつととファイナルフュージョンしやがれ！」

「早くしないと護達が危ないッゼ！」

腕の武装から弾丸を放つ紫の巨大ロボ。忍者型の勇者ロボ・ボルフォッグが二体のマシンと合体した姿——ビッグボルフォッグ。

オレンジの武骨な姿の勇者ロボ——ゴルデイマーグ。

陽気な性格と熱いシャウトが響く勇者ロボ——マイク・サウンダース13世。

「サンキューー！ お前達！」

頼もしい仲間が揃った凱は、GGG本部へシグナルを送った。

「——長官！ ガイガーからファイナルフュージョン要請のシグナルが出ています！」

「よしっ！ ファイナルフュージョン、しように——」

「待ってくださいっ!?!」

正に今、ガイガー最後のフュージョンが承認されようとした時、GGGオペレーターの一人、猿頭寺が叫ぶ。

——そう、この時。勇者達は既に原種の罠にはまっていたのだ。

『——かかったな、GGGのロボット共』

「原種……!?! 今のは、まさか……いけない!?!」

「護君、どうした!?!」

「罠だ……ガイ兄ちゃん、みんなっ!! 逃げてえ——っ!?!」

「護っ!?! どこに……うっ!?! こ、これは!?!」

どこかから聞こえる護の声と気配、それを感じた凱だったが次の瞬間彼と勇者ロボ達は、変貌した研究所から発生した異様な“穴”に吸い込まれ出した。

「強力なエネルギー反応が増大しています!」

「なにっ!?!」

「これは……ESウィンドウ!?!」

「いや違う……似ているが更に異質なものだ!」

腕原種の罠にはまった勇者達は、身動きも取れずエネルギーの渦へと沈んでいく。

その光景を見たオービットベースにいる仲間達は悲鳴を上げた。

「――NO!! ガイガーの位置を中心にエネルギー反応!! 特殊ESウインドウ拡大止まりませんツ!! ドンドン飲み込んでいきマースツ!!」

「おのれ原種めなんちゅーことしてくれたんじゃ!! ESウインドウに施設で生み出されるあらゆる超エネルギーを無茶苦茶に混ぜ込みおつた!! エネルギーが混ざり合ったあれば、もはや“窓”と言うより“沼”の様な状態……ああも足を取られては抜け出せんぞ!!」

オペレーターの一人スワン・ホワイトが観測される現象を見て焦り叫ぶ。そして麗雄の兄である獅子王雷牙は、信じられない観測データに驚愕していた。

「何か対処法はないのですか博士!!」

「調べているがこのコンピュータでも数値化しきれん反応が起こっておる……!!」

このままでは、彼等は何処かへ飛ばされてしまうぞ!!」

「博士、それは……まさか超竜神の時と同じ!!」

「いや、それよりも深刻だ……!! 異常に混ざり合ったエネルギーのせいで、行き先の予想も計測も不可能だ! おそらく原種でさえわかっておらんはず! 良くても遙か宇宙の彼方に飛ばされるか……!! 最悪この世界以外、別の次元にさえ飛ばされかねん!!」

「馬鹿な……それでは!？」

「ダメ、逃げてガイ……ッ! ガイイイイ——ッ!？」

雷牙の言葉を聞いてGGGの長官、大河幸太郎もまた驚愕し、機動部隊オペレーターである卯都木命が悲鳴をあげた。

「フハハ……! 敗れたりGGG! それをただのESウィンドウと思わぬことだ……どこへとも知らぬ世界の次元へ通じる一方通行の次元トンネルッ!」

「NO!?! マイフレインズ! 今助けるッゼ!!」

「こ、この重力値は……っ!?! い、いかんよせ、マイクウ——ッ!？」

一人空中に飛んでいたために難を逃れたマイクがガイガー達を助けようとした時、雷牙がこの空間の異常な重力数値に気が付き叫んだ。だがそれとほぼ同時、マイクは近くにあったゴルディマーズの手を取ってしまった。

「マ、マイク!？」

「ゴルディマーズ、今引き上げ……NO!？」

ゴルディマーズの手を握り自身が乗る飛行ユニットバリバリンの出力を全開にしたマイク。だがマイクは、ゴルディマーズを引き上げるところか徐々に自分までも引きずり込まれ始めたのだ。

「ダメだ……ッ!?! あのESウィンドウ事態の引き込む力も尋常ではない!! マイクの

バリバリーンでは、ガオガイガー達を引き上げるところか……!!」
「ジ、ジーザス……ッ!!」

マイク自身自分の出力が他の勇者ロボに比べたら低い方なのはわかっている。だが手を取った相手が超重量のゴルディマーズである事を加味したとしても、ここまで強力に引き込まれるとは思いもしなかった。

「く、くそ……!! この程度の……ウオオッ!!」

「足掻いても無駄だ……むう?」

「——急げっ! アマテラスのクレーンで引っ張り上げるんだよ!」

GGG戦術アドバイザー火麻激の怒声がとんだ。凱達が乗って来た戦艦、ディビジオンIV 全域双胴補修艦アマテラスには巨大なクレーンが二つありそれを用いてESウインドウに沈むガイガー達を引っ張り上げようとしていたのだ。

「させると思うかあ!」

「しまった!?!」

それに気が付いた腕原種は、腕から強力な重力波を発生させアマテラスを狙う。直撃は免れたアマテラスだったが、一本のクレーンが吹き飛ばされてしまった。

「無駄と言っただろう! 諦めてカインの遺産と共に次元の果てに消えるがいい!」

それを嘲笑う腕原種だったが……。

『——させない』

「むう!? なんだ、何奴!」

『世界の均衡が崩れる可能性が生まれた時、私は顕現する!』

「なにい!？」

『二つの世界、その均衡を崩すものよ……! 消えよ!』

「又ウ……おおつ!? 次元の先からの攻撃……馬鹿なあ!？」

突如ESウインドウより響いた声。それに驚いた腕原種は、別次元からの攻撃に不意を打たれる。次元を切り裂く攻撃は、研究所から生えていた腕原種の“腕”を切り裂きそのコアがある部分をESウインドウへと落とした。

「しまった……!?! このままでは私まで……!」

『均衡を破壊するものよ、消え去るがいい!』

別次元の先に見える蒼い光を放つシルエット。刃を振り上げたそれは、腕原種にトドメを刺そうとしたが——。

「ダ、ダメ……ダメだ! 原種は、そのコアは人間なんだあ!」

『——!?!』

だが攻撃の直前、その存在を感じ取った護が叫ぶと彼の意志を向こうも感じたのか攻撃を止める。すると腕原種のコアは、破壊されぬままESウインドウ落ちて行く。

「くそ、なんたる失態……！　だが——」

人間体に戻った腕原種は忌々しく自分に攻撃を加えた「存在」を感じ取りながらも、静かにESウィンドウに沈んでいった。

そして残された勇者達と護は——。

「クレーン一本じゃ一体が精一杯かよ……!?　一番近いのは……!」

「撃龍神……うおおおつ!!」

「超竜神、なにを……つ!?」

「それにつかまれえ！　撃龍神っ!」

姿勢を立て直し無事なクレーンをおろしたアマテラスだが、殆どESウィンドウに沈んだ勇者達を全員引っ張り上げるのは不可能だった。下したクレーンに一番近い位置に居たのは、撃龍神でありすぐそばにいた超竜神は、撃龍神を片手でつかみ上げるとパワーを全開にして下半身が沈む撃龍神を持ち上げクレーンへと投げ飛ばした。

咄嗟に撃龍神はクレーンを掴んだが、その眼下にはもう上半身の一部しか見えない超竜神達があった。

「ふ、ふざけるな!?　超竜神……また、また俺を残すつもりかあ!」

「よせ撃龍神！　今手を離したら吸い込まれて今度こそ出れなくなる!!」

「しかし!」

「今はお前達の全滅だけは、避けねえといけねえんだ!!」

もう一度超竜神達の元に戻ろうとする撃龍神を止める火麻。アマテラスは現在ESウィンドウに吸い込まれないギリギリの高度を保っており、クレーンから手を離せば撃龍神は今度こそ出れなくなり、それどころかアマテラスまでも吸い込まれかねない。

「撃龍神、大丈夫だ……。星の海からも一度戻れたんだ。私は……。私達は必ずまた戻る！」

「ちよ、超竜神……!」

「そうだ、俺達は諦めたりしない! 長官、みんな……。命っ! 俺達の戦いは終わっちゃいない! 俺達は絶対に戻る! 護と父さんを連れてな!」

「ガイ……! 我々も諦めたりしない、必ず助ける方法を見つける!」

「ああ……。信じ、て……。待っ……。勇氣と共に……!」

「……。ガイガー及び超竜神達の反応……。消失しました」

「ガイッ!? そんな、ガイ……。ガイイイイイ——ッ!」

ノイズが混ざり遠のく凱と勇者達の声。命は悲痛な悲鳴を上げた。

「……。異界への扉か」

「次元も超えた世界……。位置観測は、不可能に近い」

「うむ。だが……」

「ワルダントとの事があつて少し経つが、特に変わった様子も無い……本当に良かったよ」

ジータ達は、別件でこの研究艇の近くにまで来たため、久しぶりにシロウ達と顔を合わせに来たのだ。シロウは、自慢の息子の世話について大変そうに話しながらも、その表情は実に明るい。

——そんな時であつた。研究艇全体に警報が鳴り響く。

「何事だ!?!」

羅生門博士が叫ぶ。それと同時に彼らの傍に機械の女性戦士が降り立った。

「——シロウ」

「ロボミ!?!」

彼女の名はロボミ。遙かな時を超え、蘇つた鋼鉄の戦士。

「一体何があつたんだ!」

「来ます……」

「なに!?!」

「次元を、世界を超えて……何が!」

彼女のセンサーは、この研究艇に近づく存在を察知していた。そして、その事を証明するかのよう、彼女達の頭上に大きな“扉”が開かれる。

「あれは……!?!」

「何だと言うのだ!?!」

見た事も無い異様な空に空いた扉。愕然とするシロウ達だったが、更に驚くべきことに、その扉より幾つかの物体が降り注ぐ。

「何かが落ちてくるぞ!?!」

「いかん、みんな逃げるんだ!」

シロウ達は慌ててその場から離れ建物の陰にはいった。その間にも空から落ちる物体は、速度を上げて研究艇へと迫った。

そして――。

「う、うわああああ――っ!?!」

激しい轟音と衝撃。巨大な羅生門研究艇が大きく揺れビィヤルリア達が悲鳴を上げた。落下した物体は、研究艇の中央部にある大型プールへと落ち、激しい水柱をあげ周囲に水飛沫を飛ばした。

「い、いったい何なんだよ……」

「一瞬人型のものも見えたが……」

霧のようになった水飛沫の中、ビィ達は恐る恐るプールの方を物陰から覗く。あまりに一瞬の事で彼らは何が落ちていたのかはつきりと見えていなかったのだ。

「良かった……人がいたんだ……。ありがとうギャレオン、僕だけじゃきつとあの空間で博士を守れなかった……」

彼らを守るように障壁を作り出す緑の少年の姿があった。

「緑の……男の子……？」

「みなさん、ガイ兄ちゃん……博士をたす、け……——」

「いけない!？」

緑に光る少年は、ルリア達の姿を見ると安心したのか発光現象も止み気を失う。咄嗟にシロウがかけより彼を支えた。

「このライオンメカは、この子達を守っていたのか……」

「それでは、他の落下物は……」

巨大なライオンメカを前に呆然とするシロウ達。だが一方——。

「……………」

この時、ロボミは一人落ちて来たライオンメカとは別の方向へと飛んで行き消えた。何者かかの存在に危機感を覚えた。

突然起きた混乱、それは新たな戦いの始まりだったのだ——。



君たちに最新情報を公開しよう!!

■ 原種の罨により大地が島となり浮かぶ空の世界へ飛ばされた勇者達。

そして、勇者と特異点の邂逅。 出会う「緑と蒼」 神秘の少年少女達。

「オイラはビイってんだ。 オレンジのおっちゃんは、なんて言うんだ？」

「おいおい、 おじさんはないだろ……これでもまだ二十歳なんだぜ？」

元の世界に戻るため、この世界で出会った騎空団を率いる団長の助けを借りる凱達は、同時にこの世界でも勇者として使命を果たす――。

「ガイ兄ちゃん大変!! 街の建物が燃えてるよっ!？」

「氷竜、炎竜! お前達は消火と救助活動を!」

「お任せください!」

「俺達の出番だな!」

赤き炎のアツイヤツ!

青きクールなスゴイヤツ!

「攫われた子供の救出依頼……どの世界にもヒデエ真似する奴もいるもんだな」

「……その依頼、我々がお手伝いいたしましょう」

「だな。 団長達に面倒みられっぱなしも悪いしな」

紫の霧に潜むヤツ!

「ど、どうしてこの場所が分かったんだ!？」

「私のセンサーは、僅かな痕跡も見逃しません……観念して攫った子供達を解放しなさい」

「くそ、捕まってたまるかよお!!」

「おっと逃がしやしねえぜ!!」

オレンジ色したデカイヤツ！

「空のみんなアー!! 盛り上がってるかあーいつ!!」

「A h h h h——……!!」

「Y e a h!! アオイドスも最高だっぜ!!」

「Y E S……!! デカイドスも、最高だ……!!」

「OK!! 続けていくぜ——『P o w e r o f D e s i r e !!』」

ハート震わし歌うヤツ！

異世界だろうと変わらずに、戦う勇者ロボ軍団!!

「僕、この世界に来て不安だったけど……出会えたのが団長さんやルリアさん達でよかった!!」

「はい、私もマモル君達と出会えて良かったです!!」

勇者達と空の住人、出会うはずの無かった彼らの間には、確かな友情が生まれていた。

だが、そんな平穩を破り現れる原種――。

「貴様腕原種!! ついに姿を現したかっ!!」

「吠えるなGGGのサイボーグめが。既に準備は整った……貴様らは、この島諸共沈むがよいつ!!」

空の世界でも暗躍していた腕原種。姿を現した原種は、帝国の戦艦と融合し巨大な剛腕戦艦と化しており、凱達のいる島ごと空の底へ重力波で沈めようとした。

「ハ、このままでは……島が沈む……!!」

「いや、それよりも先に島が碎ける……そうなつては……!!」

絶体絶命の危機、その時――。

「――不甲斐ないな、ガイ!!」

「この声は……っ!?!」

「待たせたなお前らっ!!」

「おお、撃龍神!!」

空に突如開いた世界をつなぐ窓。そこより現れたのは、凱にとつてライバルと言える異星のサイボーグ“ソルダートJ”が操る超弩級戦艦ジェイアーク。そして元の世界に残された撃龍神。

こうしてつながる二つの世界。その時、勇者と空の戦士たちの戦いは加速していく。

「世界の均衡が崩れる可能性が生まれた時……私は顕現する！」
「貴様は、あの時の奴か……っ!？」

「この世界に機界昇華は必要ない……去るがいい原種よっ!!」
顕現する調停の翼!!

「俺達も行くぞロボミ!!」

「はい、シロウ……!!」

「ギガントオーダー！ カイザアア……オンツ!!」

起動せよ極鋼巨帝グランゴッドカイザー!!

そして……!!

「ガイ、こちらからガオーマシンを飛ばす!!」

「助かった!! 待ってたぜこの時を!!」

ファイナルフュージョン承認だ!!

「ファイナルフュージョン、承認!!」

「よっしやああああ——っ!!!!」

今だ超人合体だっ!!

「あれが……あれがオレンジのいちちゃん!？」

「マモル君達の言っていた……くろがねの巨人!!」

無敵のドでかい守護神っ!!

「うん!! あれこそが……ぼくらの勇者王っ!!」

「ガオツ!! ガイツ!! ガアアアア——ッ!!!」

果たして、ガオガイガーは、空の戦士達は島を、人々を護ることが出来るのか。
「お願い、力を貸して……バハムート!!」

——これが勝利の鍵だっ!!

グランプブルーファンタジー 蒼穹黄金鉄塊 I—II

■ ■
グランプブルーファンタジー 蒼穹黄金鉄塊

■ ■
フアータ・グランデ空域、ザンクティンゼル。その島は、小さな村があるだけのこれまた小さな島。

自然の中で暮らす穏やかな島には、一人の少女と子ドラゴンがいた。

「行くよビー！ 早く！」

「待ってってジータ！」

小さな頃から共に過ごした二人は、村のそばにある森の中を駆けた。何時もの様に鍛錬に励んでいた彼女は見たのだ。森の中に落ちていく「なにか」を。

好奇心を抑えきれない彼女は、ただ一匹ビーだけを伴い森を走る。

そしてあの「なにか」が落ちた場所へたどり着き目当てのものを探した。遠目では人間のようにも見えたそれは、果たしてどこに——。

「おいジータ、あれ」

「え？」

ビィが指差し叫ぶ。ジータも同じ方向を見た。そこには、大樹に背を預け気を失っている一人の男がいた。

咄嗟にジータは駆け寄り声をかけた。息はあつた。見たところ怪我もない。

褐色の肌の男は、白銀の髪を静かに揺らし眠るように目を閉じていた。来ている白の鎧から、騎士の様に見える。

——だとして、何故そんな男がここ？

ジータが疑問を感じていると突然男の目が開いた。

「うう……？」

「あ、意識が……大丈夫ですか？」

「……な」

「な？」

「……何いきなり話かけて来てるわけ？」

「へ？」

それがジータとビィの、そして空から墜ちた“黄金の鉄の塊でできたナイト”——プロントさんとの出会いであった。

この出会いから始まる長い長い大冒険——蒼穹の特異点ジータ、黄金の鉄の塊ででき

たナイトブロントさん。二人の行く先には、常に大騒動が巻き起こる。

ブロントさんとの出会いから少し経ち、蒼の少女ルリアとカタリナとの出会い――。

「その小娘といい邪魔ばかり！ いい加減大人しくその少女をこちらに渡してほしい
ものですネエ！」

「その提案はどちらかという大反対だな」

「なあにいっつ!」

「お前ら勝手に平気に兵器あつかいされる奴の気持ち考えたことありますか？ マジで
ぶん殴りたくなるほどむかつくんで止めてもらえませんかねえ．．?」

「こ、このとんがり耳が……我らエルステ帝国に逆らうとでも!」

「第三者の中立的立場から客観的な意見を言っただけなんだが．．?」

「君よすんだ!？ それ以上ポンメルン大尉を挑発しては……っ!」

「大丈夫！ ブロントさんは強いんだよ!」

「なんてたつてオイラ達のメイン盾だからな!」

「メ、メイン……盾?」

時にエルステ帝国の兵達をジータと共に返り討ちにし――。

「ポート・ブリーズはお終いさ！ ティアマトは暴走し住民ごと島は沈む!!」

「てめえ……なんてことをっ!」

「あははっ！ 残念だったねえ〜！ 脱出艇もなくなつて君たちはゲームオーバーつてわけ——」

「メガトンパンチ!!」

「ぶえっ!」

「ブ、ブロントさん!」

「普段は確かに心優しく言葉使いも良いナイトでもおまえらのあまりのごく悪鱈に完全な怒りとなつた・・・ 仏の顔を三度までという名セリフを知らないのかよ」

「ブロント、お前……」

「さんをつけるよでこすけ野郎!」

「えっ!? わ、わりい……!」

ポート・ブリーズで帝国の悪事を砕き、ジータにでこすけ呼ばわりされたラカムを仲間——。

その後もイオ、オイゲン、ロゼツタと頼もしい仲間達を得たジータとブロントさん一行。険しい旅も仲間と共に乗り越えて行く。

そしてその仲間に危機が迫れば躊躇う事無く助けに行く。だからこそナイト。

「ジータ、ルリア……それにヴィーラのために私は……」

「お前それで良いのか?」

「だが！」

「俺の程でないがカタリナもそれなりなナイトと思っていたんだが？ その浅はかさは愚かしい。自己満の塊な今のお前はナイトじゃない。守るべきもの守ってこそがナイト」

「プロントさん……」

「……ルリアが待つてるんだが？」

その心こそが、黄金の鉄の塊。

「いい加減にあきらめなさいっ!! お姉さまは誰にも渡さないっ!!」

「おいイ？ お前らは今の言葉聞こえたか？」

「いいえ、聞こえませんっ！」

「なにか言ったの？」

「オイラのログにはなにもないな」

「ほらみるこれが現実。ナイト以前に人としてお前のやり方は大失敗だったんだが？」

「なにをつっ!？」

「お前調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？」

「お前……っ!?! お前がお姉さまをたぶらかさなければ……お前がああ!!」

幾多の苦難を乗り越えて、プロントさんは旅を続ける。ジータ達を星の島へ導き、い

アルビオンでは暴走したヴィーラを倒し正気に戻したブロントさんとジータ。そしてジータにでこすけ呼ばわりされるラカム。

彼等はその後も多くの島々をめぐり、今回ジータ達が訪れたのは……。

「ぐくり……ん、んこが噂の島か……」

古戦場と呼ばれる戦いの地。魔物と星晶獣との決戦が行われる激闘の島。

この地で定期的に表れる星晶獣達、活発化する魔物、それらを相手に自分達の実力を試そうとジータ達はここを訪れたのだ。

魔物のいない上陸地点、そこからもわかる戦いの空気にビィとルリアは、武者震いで震えた。

「来たばかりだけど、ピリピリした雰囲気がよくわかるぜ……」

「は、はい……私も緊張します……」

「確かに緊張する……けど大丈夫!! あたしも頑張るし、メイン盾のブロントさんだっ
ているんだからね!!」

「あとでジュースを奢ってやろう」

「9杯でいいよ」

「多い多い多い」

ワザとなのか天然なのかわからずにブロントさんとジータの会話にビィがツツコミ

を入れたりしていると……。

「あつれえ〜！ やあやあ、久しぶり団長ちゃん達〜！」

「あ！ ドランクさんとスツルムさんっ!？」

「まただよ（笑）」

そこに現れたのは、黒騎士の雇われ傭兵であるコンビ、スツルムとドランクと遭遇。これまでも何度か戦ったこともある二人。驚くジータ達、思わずプロントさんもあきれ顔。だがこの時は……？

「帝国の奴らがなんでここにいんだよっ!!」

「こつちも色々と事情がある……。安心しろ、今日はそつちの邪魔はしない」

「ほ、本当かよ?」

「嘘を言っただうする。第一この島でその男プロントさん相手に行き成り戦い挑むほど馬鹿じゃない」

「ほう、経験が生きたな。お前の見込みは、なかなかある。俺を強いと感じてしまつてるやつは本能的に長寿タイプ」

「どう言う意味だ……。それに、こつちも面倒な人間を拾つて——」

スツルムが疲れた様子を見せた時、物影よりジータ達には聞きなれぬ男の声をする。

「まさかここで会うとはなあ、プロントオ……!」

「何いきなり話かけて来てるわけ？」

物影から現れた一人の忍。黒の目線で顔の隠れた如何にも怪しく、物影から現れたはいいが白昼堂々忍んでない男。

「顔も見ずにその返事とは、相変わらずだなブロントよお！」

「さんをつけるよでこすけ野郎!!」

「つて、ここでもそれ言われんのかよつ!!」

ブロントさんと浅からぬ因縁を感じさせ、ジータにでこすけ呼ばわりされる男の名は、通称「汚い忍者」。ブロントさんと同じ世界から現れた男で、ブロントさんに勝るとも劣らない実力があるようでないような男。

「僕らもちよつと腕試しつてとところでさ。こちらの汚にーさんの実力も知りたくてね」

「ドラंक今イントネーションおかしかつたなあおいつ!!」

「少し前に拾つてな。腕も悪くないようだから色々き使つてやつてるんだ」

「人を犬猫みてえに言うなスツルムツ!!」

空の世界で奇妙な再開をした騎士ナイトと忍にんじや。なんの因果か彼らは、この古戦場でまたも因縁ある相手と戦う事となる。

「異世界でもベヒーモスとはな……はんつ!! だが今更負けるわけネエ!!」

「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」

「そっちこそうるせえつての!!」

古戦場に現れる強大な魔物ベヒーモス。それを倒していくジータ達であったが……。

「な、なんだあのベヒーモスッ!? 明らかに他とちげえぞ?」

「まるで、星晶獣……けど、なにか違います!!」

「っか、こいつぁ!?!」

「キングベヒんもス……!!」

戦い方も信念も違い、相性も悪い二人。だがただ一つ仲間を守ると言う共通の使命を持つ。その思いさえあれば、水と油さえ混ぜる。

「異世界でもキングベヒーモスとはな……はんっ!! だが今更負けるわけネエ!!」

「うるさい、気が散る。一瞬の油断が命取り」

「だからそっちこそうるせえつての!! 忍者が一人、忍者が二人……ファイナル分身!」

古戦場にて盾の座と仲間を護るため、騎士が駆け忍が舞う――。

「……汚いなさすが忍者きたない」

「汚いは……褒め言葉だ」